# 天皇制と新興宗教（対談）

奥村健太郎
（聞き手）丸山照雄

## 一、神道の純粋性と信仰体験

**丸山**　奥村さんは非常に特殊な経験といいますか、活動の経歴を持っておられるので、私いろいろお話をうかがいたいのです。全く新鮮な問題意識がそこから出てくるのではないかと考えたものですから、偶然に知り合った機会をとらえまして現宗研でお話し願うことになったわけです。うかがったところでは、経歴についてはお話しにならないといわれましたが、経歴じゃなくてもけっこうです。簡単な学歴でもお話し願いたいと思います。

**奥村**　経歴といっては変ですが、僕は大学二年のころからかなり長い間、広い意味での神道関係の民族派といわれているものの内部にいたわけです。そういうなかで、神道問題というものに対して非常に関心を持っていた。ところが、いわゆる神道というのは普通、戦前の国家神道のせいもあって、イコール天皇信仰・天皇中心というふうにとらえられている。ところが、よくみれば、一見、天皇中心にいくような神道内部にそうじゃない傾向が強かった。そのことがなぜであるかという問題意識を、神道内部にいながら僕の場合は追求していった。もちろんそれを追求することは、天皇中心にならないような神道を邪説として退けるような、護教的な立場に立って究明していったわけですがそのことによってほんとうの意味での民衆の間にある神道的なもの、土着的なもの自体と天皇というものとは、普通右からも左からもそうであるといわれているようにここは結合するものではないのであって、逆に土着的なものと天皇的なものがきびしく対立するような可能性があると考えた。そういうことを知り、それを通して、逆に土着的なも

のと天皇との結びつきに疑問を持ち、いわゆる普通の意味での神道民族派といわれているものから、土着的な感じを持ちながらも離れていく。そういうプロセスを僕の場合はとっていると思うのです。

**丸山**　学校は……。

**奥村**　早稲田の商学部です。

**丸山**　大学の二年ころ神道の信仰を持たれたということは、どういう契機からですか。

**奥村**　自分はいわゆる田舎の出身なもので、幼いときにアニミズム的な要素というのは非常に強かった。自分の感覚、精神の内面では、戦後教育を受けていくプロセスの中においてもなお別なもの、そういうものと全然異質なものが熟していって、ことばとして表現出来ないままに、戦後民主教育を受け、その中で右翼に関心をもったり、左翼思想に関心をもったり、という振幅はあったにしても、戦後民主的な意識から離れることができず矛盾的な精神情況であったと思うのです。

それがたまたま、「生長の家」という大本出身の神道系の新興宗教に家のものが関係したということがあって、高校のときちょっとそういう意識が出たんですけれども、またすぐそこから飛び出しちゃった。やはり僕の内面的なものとは異質なものがあったのです。それが大学一年の終わりころから少しずつ関心は持ちはじめていたのが、二年になってある程度強い関心をになって現われてきたんですがでもやはり自分のもっているものと異質なものを感じてしまうのです。神道的な意味でのいろいろな神秘主義がありますけれども、神秘主義の説を大学二年の秋に知って、自分の内面にあった、内在的にあったアニミズム、神秘主義的なものというものを自覚的な意識のうえに乗せることになりました。そういうことがあって、まず最初「生長の家」から始まるわけです。

**丸山**　田舎はどちらですか。

**奥村**　福井県です。

**丸山**　そうすると、福井だから特にアニミズムを受けとって育ったということではないのですね。

**奥村**　全然違います。一般的な人間の、日本の地方の風土のなかにあるもの、「お米のなかにほとけがいる」とか「野や山にタヌキやキツネがいる」というようなことです。

**丸山**　大学二年のときからやや自覚的といいますか、内在的な形で対象化されたものとして神道系の宗教のなかにはいっていった。ある場合には信仰という形で自覚化されたと思うのですが、その神道的な信仰というもの、アニミ

ズム的なものを持っておられたといわれますが、私、前にうかがったときには、仏教やキリスト教でいうところの信仰とはちょっと違うもの、要するに文字によって論理化することのできない信仰なのだということを指摘されていたと思うのですが、それと〈土着〉的精神とのかたちとのかかわりの問題を、一応神道的信仰体験というものでとらえるとどういう表現が可能なのかお話いただけないでしょうか。

**奥村**　「生長の家」は太本系の新興宗教ですから教義体系をある程度持っているわけです。そうすると、いわゆる既成宗教でいうような信仰に近いものがあるわけです。そういうものに自分も一応触れてみたわけですけれども、そのなかで非常に内在的な意味で矛盾を感じとったわけなんです。アニミズム的な世界と、神を信ずるというような意味での信仰の世界と、その二つのものが相互に異質なものであって、一緒になれないわけです。そういうことが「生長の家」の教義の歴史的な変質への私自身の批判となり、同時に、そういった面に対する批判がはっきりした形で出てきたんです。そうしたなかから神道国学といわれている国学原始神道の世界に僕の場合はひかれていきました。いわゆる神というのは、いうまでもなく神道の場合は八百万の神々であるわけですけれども、それは、善とか悪とか、人を救うとか救わないということとは無関係です。われわれが祈ったからといって、変なことをするかもしれない。台風を起こすかもしれない。善と悪を超越して聖なるものである。そういう世界なのです。

宗教の世界へはいる場合普通いわれていることは「人生とはなにか、人間とはなにか」という青年期における問いがあって、信仰の世界にはいっていくんだといわれています。ところが神道的な世界にはそんなものはない。「人生とはなにか」とか、生きる意味を問うこと自身、論理的なものによって人間の生命的な感動性というものをむしろ疎外しているのだ。そういうふうにとらえちゃうわけです。その問いがなくて、ただ感動し、泣いたり、わめいたりする感情の世界に没入して論理的に自己対象化をしない、そういった感覚の世界のなかに神々の世界をみるわけなんです。

**丸山**　これは仏教の信仰からみたら非常にわかりにくい信仰の世界です。ある意味では異質な信仰体験ですね。

**奥村**　ただ、そういった世界は神道を信じている人がほとんどそういう信仰の世界を体験しているかというと、そうではない。やはり神道のなかにも、古くは平安時代から

ですけれども、キリスト教なり、仏教なりの影響を受けてだんだんと、神を善にするとか、善いことをすると死んでから報われるといった普通の文明宗教的な信仰方向にそれていく歴史的過程があります。そして、原始信仰的な信仰はなくなってしまうのです。そういう傾向があるだけでなくてそのほうが強いと思います。それに対して江戸時代に反発したのが国学でしょう。

**丸山**　神道の文明化に対する抵抗、批判ですか。

**奥村**　国学自身も、その時代の神道の諸展開も仏教の受け売りにすぎない。あるいは儒教の受け売りにすぎない。それに対して、因果応報を否定して、古事記、万葉を読んでそのことば通りに信じようとするものもでてきた。そこには論理的な神学体系から解放された人間のなまの感動の世界、心情の世界というものがある。しかし封建社会のなかで、仏教にしろ、儒教にしろ非常に民衆を圧迫するような倫理のあらわれかたを示している。それに対する解放、限定された意味での、内面的な意味での解放を国学は提起したと思うのです。

ところが、その国学といえどもやはりそれを貫くことは出来なかった。平田篤胤以後、逆にキリスト教なんかを導入して再びイデア化していく。

**丸山**　そうすると、神道の純粋な信仰というのは情念の解放というようなものだと考えていいんですか。

**奥村**　原始的な神道の流れだけが純粋だというふうに、神道を狭く解釈すればそうだと思います。それがなんらかの形で軸になるでしょう。

**丸山**　そのへんから「生長の家」や、さらに大本を含めての問題として本論にはいっていきたいと思います。

**奥村**　その前にちょっと。神道というものを歴史的にさかのぼると、形式的な意味での天皇中心の考えが成立するのは律令国家体制になってからだと思います。それまでの神道は各地域ごとにいろいろな豪族のようなものを中心として神社があって、それを崇拝する人々がいる。そういうものが各地にあったと思うのです。それが大和朝廷が日本を征服し、統一していくプロセスにおいてその神を大和の神として人為的に結びつける。古事記の神話はその当時の民衆があの神々の世界を信じていたわけではなくて、人為的に作り上げたものだと思うのです。それにもかかわらず非常に矛盾がありまして、その矛盾に二つの大きなポイントがある。

一つは出雲の大社だと思います。大社の持つ宗教的権威は大和朝廷といえども無視出来ない権威があったと思いま

す。

もう一つは伊勢の外宮の問題です。外宮と内宮は日本の神道史をみればよくわかりますが、いつも争いをやっていた。内宮はアマテラスオオミカミを祀ってある。それに対して外宮はトヨクニノオオミカミを祀っている。常識的に考えるならば内宮が中心ということになるわけです。ところが実際は、外宮はもともとあって、内宮はあとから大和朝廷が東国を征服するためにつくったものであり、地方の民衆の間に大きな信仰心を持っている伊勢と皇室を結びつけるために、天皇中心の考え方と結びつけるためにつくったわけです。そこで内宮と外宮の争いがあって、外宮のほうでは内宮がアマテラスオオミカミを出してきていつもやられてしまうものですから、今度は逆に外宮の神をアメノミナカヌシノカミ、クニトコタチノカミと一体視するわけです。そうすればアマテラスオオミカミより古い神だし、もっと大きい神だ。それを仏教的な考え方を取り入れて、ある種の絶対神的な、一神教的というよりは、一体神教的な考え方を作り上げていくわけです。

そういった矛盾と、もう一つは、室町時代に南朝の残党がやられます。南朝というのは地域的にも伊勢神道と結びついているわけなんです。南朝の残党の影響を受けたなかに、その後の北朝の天皇に対して若干ニュアンスの違うような考え方が民衆とか、一部の宗教家の間には語り伝えられていたといわれています。これはちょっと立証出来ないのですけれども、そういった神道内部における内在的な矛盾があって、それが江戸時代になりますと、幕藩体制下における、農民の大きな苦悩といいますか、社会的矛盾からのがれたいという要求が宗教的な形をとる。その最初が富士講です。富士講の場合は仏教における弥勒菩薩の下生です。弥勒が下生して聖なる支配者になる。そのもとに人間が自由になるという考え方が富士講のなかに出てきます。この考え方はその後問題になる世直し的なものがすでに含まれています。

もう一つは、中世から伝えられている伊勢参りの伝統です。伊勢参りの伝統のなかには封建制に対する農民の即事的な解放を求めるものがあり、神の権威を利用して日常性から脱却していく。米や金なんかも地方の豪族からゆすっていく。そういう即事的な解放を求める気持ちがあったと思う。と同時に、伊勢にいろいろな地方から農民がやってきて、農業技術の交換もやれば、諸国話の交換もやる。そうした下からのネーション統一への内在的な可能性はあったと思います。

それと同時に、伊勢というものが天皇と結びつくことはそれほど民衆のなかには強くなかったかもしれないけれども、あまりに苛酷な封建時代の搾取に対して、「かって古代はそうではなかったんだ。大いなる古代だった」という考え方があったと思います。古くは謡曲のなかにも、「古代には関所がなかった」とか出ています。もちろん後の支配者の自己正当化のための表現であったかもしれません。大塩平八郎の乱にも、そういった流れはあると思う。それに拍車をかけるのが、伊勢参りに対して侮蔑的な気持ちを持っていたけれども、国学が復古的な考え方を掲げた。

しかし、それも平田篤胤の思想が民衆化していくと、一面においては神道の内在的な解放性というものを非常に倫理主義的な方向へもっていきながらも、民衆の間にひとつの新しい時代がくるという幻想といったものを与えていった。

それが明治維新のときに官軍赤烽隊なり、隠岐島の隠岐コンミューンといわれるような一種の自治政府になって出てきたと見てもいいのではないでしょうか。そういった流れにつながっていくと思う。そういうものの背景があって明治維新があった。明治維新になって、農民に対する税負担はよくならない。そういうところが大きなきっかけになると思います。

**丸山**　そういう歴史的な背景が例えば大本の成立に深いかかわりがあるわけですね。そうすると、大本の場合、出雲に近いということは関係がありますか。

**奥村**　あります。ただ、その前に整理したいが、天理教が最初のうちはある程度幻想を持っていたらしい。新しい時代に対して。ところが幻想がさめたときには絶望に変わる。そこで有名なお筆先ですが、高山の真柱が唐人だという。それが神の立腹だというのです。この解釈ですが、高山の真柱というのは、高山は支配者で、その真柱は天皇のことなんです。このことを逃げて解釈している宗教者もいますが、谷底の真柱というのはそもそも天理教の代々の教主がそうなっていなければならない。高山の真柱が唐人だという、外国人説を唱えている。

これは江戸時代にも中国かぶれした儒学者から始まって民衆の間にはいってくる。それが明治以後、急速に天皇に対する反感と結びついて、「いまの天皇は外国人の子孫じゃないか。外国からきた支配者じゃないか」ということが無意識のうちに出てくる。そうした場合に問題になってくるのは、大和朝廷にほんとうに反抗したのかどうか知らないけれども、反抗したと称せられる出雲です。そこでどう

しても出雲と結びつく。

**丸山**　天理の場合ですね。

**奥村**　天理の場合は出雲までいったという。僕自身は、天理が出雲復権といわれているものを加味したかどうかよくわからない。ただ、大本から別れた世界救世主教の教祖岡田茂吉は天理教のなかにそういった考え方があったというふうにいっております。大本は出雲復権だから、そういう立場で天理に投影したのか、それとも天理自身にそういう考え方があったのかどうかよくわからない。

**丸山**　われわれとだいぶ関係があるのでおうかがいするのですが、修験道とのかかわりはどうなんでしょう。

**奥村**　天理教の場合はみきさんが、修験道とか行者といったいろいろなものを習って、それが彼女の宗教的な出発点のひとつの基礎になっている。大本以後になると山伏は南朝の復興運動をやっているとか、あくまでも出雲の復権のための運動をやっていたとかいわれている。それはちょっと狂信的に信じ込んだのではないかといわれている。仏教からみれば弥勒菩薩の下生というものがあって、これだけでははっきりとした神学体系にはまだならないと思う。天理王というのは別な仏教用語ですが、天理教は、最初はみきさんが修験道の影響を受けた関係で、仏教の一派みたいな形をとりつつ、そこから神道に形を変えていくわけです。そういうなかで仏教から学んだものはやはり弥勒菩薩の下生、あるいは天理王という仏教における救世主思想だと思う。

それと国学が平田篤胤のときに、キリスト教をとりいれた。キリスト教の思想を国学の中に密輸入するわけです。そういうキリスト教の思想がはいってくると、キリストの再臨というようなものが大本の場合には結びついていく。どういう形で結びつくかというと、スサノオノミコトはその後、イエス・キリストになったという。「いまや再びここに再臨するのだ。そのときに、スサノオノミコトを追っ払っていた高天原系統の大和朝廷から正当なる皇位をりゃく奪するのだ」というような方向へいくわけです。

出口ナオさんにはそういう思想はなかった。ナオさん自身は、金光教から出ていますけれども、思想的には天理教に近い。金光教的なものよりも天理教が強い。ナオさん自身はそういう思想は持っていないけれども、王仁三郎がいろいろ神道、国学を勉強するわけです。その勉強するうえで丸山教にいた長沢雄楯という人の弟子になる。その長沢雄楯の先生は本多親徳という人で、その人は幕末から明治にかけての国学系と、平田篤胤系の学者だといわれており

ます。鹿児島県の人ですけれども、その人が「三大皇学」と称するものを作った。これは、「天皇が天皇になる霊法があるんだ。それが、崇仁天皇のときに同殿同床をやめて伊勢神宮に祀ったアマテラスオオミカミを帰化人が来て追放した。だから、いまの天皇には天皇たらしめる霊能力がない。だから、かっての天皇のように長寿であったり、地震や台風などいろいろな気候、自然を左右する力を持っていない。それを持っているのがオレだ」というような形で出てくるわけなんです。

もちろん、「それがオレだ」といったかどうかは、資料的には立証出来ない。といい伝えられている。長沢雄楯の書いた本はあるけれども、一般には公開されていないわけです。

長沢雄楯は清水にいたわけですが、この人は丸山教の信者になっていた。ところが丸山教というのは富士講の伝統を受け継いでいるわけで、そういう意味ではもともと弥勒菩薩の下生とか、世直しの思想を丸山教は持っている。丸山教のなかでも特に西ケ谷平四郎が丸山教み組といわれている。み組西ケ谷平四郎という人です。この人は第二維新とも称して、世直しをやろうという。

なぜこういう考え方を持つかといえば、丸山教の動きのなかにはもともと幕府の残党といわれている人たち、新撰組の残党と非常に人脈的なつながりがあった。そういう意味で明治政府に対するアンチがあり、農民の明治維新に対する幻想が破れて、ひとつの絶望がある。それを利用することによって明治政府をぶっつぶそうというような意味での世直しです。だから非常に貧弱な世直しで、だれがどこの大名になるか、とか、そんなことばかり議論しているので、明治政府にぶっつぶされちゃう。そのなかに長沢雄楯がいたわけです。

そこに王仁三郎がいって門下生になる。門下生になるプロセスで激しい争いがある。ナオと王仁のけんかといわれているものですが、ナオのほうは、「長沢雄楯の門下になることは高天原にスサノオノミコトがやられるんじゃないか」という心配を持っていた。「高天原をスサノオノミコトがよくするんだ」と王仁三郎は主張したと大本では語り伝えている。そういうことは「三大皇学」と称せられるものの本を読んだことがないので、いい伝えしか知らないのです。大本系教団が、公開していないのでわからない。いい伝えから考えられる限り、もともと「三大皇学」の中には出雲を注目するような発想があったと思う。

もう一つ、大本で有名な第二の岩戸開きがある。第一は

アマテラスオオミカミがスサノオノミコトに乱暴されたので天の岩戸に隠れられた。ところが、結局ほかの神々の知恵や力があってスサノオノミコトが追放されるわけです。それが第一です。それに対して、第二の天の岩戸開きは大本のなかにある。

いろいろな名前は変えているが、アマテラスを代表するのがナオなんです。それに対してスサノオノミコトを代表するのが王仁三郎になる。これが長沢雄楯の問題をめぐってあった。実際にナオさんはどこかに隠れたらしい。でも偉いです。結局、ナオをまつり上げて王仁三郎、スサノオノミコトが勝つ。そういう形で決着がつく。高天原の復讐を何千年か後にいまやる。それを宗教的に明らかにした。

ところが、これでもまだ非常にものたりないところがある。さらにキリスト教の影響を、国学以後の神秘主義の立場からもっとはっきりさせる必要があった。それをやったのがいまの谷口です。谷口雅春というのは早稲田の英文科（中退）で、英語がよく出来る程度の教養をもっていた。大本へきて聖書の勉強なんかをやるわけです。それでキリスト再臨論と結びつけ、要約すれば大本教祖ナオはヨハネの再臨だという。

ヨハネというのはイエスの魁です。それに当たるものとして、ヨハネはナオだというふうに位置づける。それに対してキリストが王仁三郎だ。そして、王仁三郎が結局、皇統につくべきだというような意味のことを――官憲の検閲のきびしい時代ですから――きわめて複雑な論理をもって展開していくわけです。それが「皇道霊学講話」という本でありまして、大正十年に出している。これを読むと、大本自身がどういう天皇観を持っていたかがわかる。

キリスト再臨論と同時に、おもしろいのは、「霊脈論」というのを出す。これは、「天皇の血筋は血統ではなくて霊統ということになる」といって、従来の天皇観に対立する立場から、霊脈を受け継ぐものが天皇なのだ、ということを出雲の神話を解釈しながら主張している。これで一応内在的には現在の天皇に代わって新しい皇統を立てる。ニセの天皇に対して天皇の霊能を復活し、何千年か前にやられた出雲の復讐を遂げ、正当なる支配を打ちたてる。そういうこともある程度の論争はあったがそのなかから見解を一致させる。

ただ、それを表面には出せないから「天皇万歳」という形をとる。霊能天皇観が生れる背景はやはり明治政府の富国強兵、あるいは大正時代になっても結局のところ一般民衆の生活はよくならないで、国はよくなるけれども大衆の

解放感とはつながらない、という都市や小ブルヂョアの絶望感がある。それで、そうした意識を新しい救世主という方向へ持っていく。新しい救世主という方向へ持っていくと、どうしても既成の天皇制宗教には巨大な幻想力があるから、それに対抗する形で、天皇に代わる新しい天皇というような、自分自身もひとつの疑似天皇制みたいなものとして宗教的に追求せざるを得なくなる。それをはっきり出せば弾圧されますから表現することがむずかしい。しかしそこをぼかしてしまうと権力によって上手に利用されちゃうというわけです。

明治維新の前夜に農民が維新に対して幻想を抱いた。それが裏切られることによって日本の近代は成立するわけだけれども、天理教がある程度その幻想を継承した。しかしみきさんの死んだあと、みきさんの生前から幹部の間ではそうだったが、周囲に妥協していく。そういうなかで王仁三郎が立ち上がった。だから、王仁三郎自身も非常に戦争をきらい、資本家に対しても反感を持つ。労働争議なんかには戦いが近いんだというふうなことばで語っている。

それにもかかわらず一面においては、もともとファシズムの温床になるような要素もあった。農民反抗の時代ではないわけですし、旧中産階級の集団を基盤におく宗教ですから国家主義的な方向へもいく。そういう矛盾があったと思うのです。

**丸山**　天理の「ほんみち」が現在に至るまで非常に強烈な反天皇的情念を持続している。それは、天理、大本の問題とは教義的にかかわらないんですか。

**奥村**　天理の基本的教義というものはみんな引っ込めちゃう。ですから、いまの天理教の教義はかってのみきさんの天理教の精神とは全くかけ離れたものでしょう。だからそれをあくまでも純粋に天理教の、天理教徒としての信仰の道に生きるとすれば、どうしても叛旗をひるがえさざるを得ない。そういう意味で、天理教の一部で造反運動が起きているけれど、その課題は自分自身の宗教の歴史をどこまで追求できるかにかかっている。中山みきの書いた書物をどう受けとめるのか、それを抜きにしてはできないと思う。

**丸山**　大体歴史的に宗教思想の展開の経過というものを大づかみに話していただいたんですが、明治期に天皇制がはっきりと成立をみる。しかし、天皇制を創りだした基盤は大衆の日常的宗教性であり、その運動であったと思う。民族的あるいは民俗的な意識の基盤といいますか、そういうものを基盤として天皇信仰をつくり、同じ基盤から大衆

自身の手によって神道系、新興宗教が生れるわけですね。同じ基盤から、一方は権力によって国家神道を作り、他方は教派神道を作っていく。その間の矛盾を指摘されたのですけれども、今度は形のうえで、表面化され社会化された問題として何があったのかうかがいたいのです。いままでは内面的な教義的な問題に触れられたんですが。

**奥村**　天理教の場合は弾圧を受けて、教義の根本的なもの、「泥海古記」をも含めて全部隠してしまう。大本の場合は大正十年に第一次弾圧を受けた。そのあとの大本は一般的にはファシズム化したといわれている。確かに昭和神聖会を作ってファシズム運動をやっているが、大本の文献を読んでみるとわかるが、天皇制ファシズムとはちょっとニュアンスが違う。天皇より日本です。ポイントが。

もう一つは紅卍字会との結合の問題がある。紅卍字というのは中国にあり、各種の民俗的な信仰に根拠をおいているのですけれども、この宗教というのはほんとうの意味での民衆から生まれた宗教ではないのです。もともと中国の中央官吏が作った宗教組織で、宗教組織であると同時に、各界の有名人がはいった、サロン的な機関なんです。それを通していろいろな政治的謀略にも役立つようなシステムになっていると僕は考えるのです。この紅卍字と大本が提携したことは大本の第二次弾圧にある程度影響があったと思う。大本と紅卍字とのかかわりは実証的にいえないが、表面の動きから推してみた場合、大本が紅卍字を利用して中国侵略の先兵になろうというような働きと同時に、日本と蔣介石政権を和解させ反共、白色帝国主義の線で一致させようというような、いまでいうとハト派ですが、そういった考え方をもったのではなかったか。蔣介石のほうにもそうした要求は強かったんですから。そういう考え方というのは大本のなかにもあったんじゃないかと思います。

戦後、大本は平和運動をやっています。人類愛善会などそうです。それが最近は変わりました。つぶされました。つぶされたということは考えようによっては大きい意味を持ってくると思います。

紅卍字は戦後、一九六二年だったと思いますけれども、再び日本に組織を確立するわけです。このときに紅卍字の役員なんかに出口イサオなどがはいっていく。大本、あなない教、世界救世主教といった大本系の宗教団体と紅卍字の間に友好関係が出来る。ところが、紅卍字は中国の蔣介石政権とある程度結びつきがあるといわれていますと同時に、自民党の素心会グループといった広い意味での反共グループとの間にも提携があるわけです。そういうことが大

本自身の戦後におけるプロセスのなかに大きな意味を持ったんじゃないか。外在的な意味で。内在的には大本自身の弱さですが、だから、戦後における紅卍字との結びつきは大本にとって反動的であったけれども、戦前における結びつきは正確に評価する場合、まだ明らかにされない残された問題をはらんでいるんじゃないかと思います。

**丸山** このような動きはほとんど明らかにされていませんね。

**奥村** 明らかにされていませんし、資料的にも明らかにすることがむずかしいと思います。大本が第一次弾圧を受け、昭和十年に第二次を受けるが、この大本の弾圧があって分解する。分解のプロセスが形の上において非常におもしろいが――というのは大本から分解したなかで世界救世主教、あなない教、神道天行居とかが相次いで出てくる。そのうち特に戦前においていちばん注目を引いたのは生長の家です。生長の家の谷口雅春はもともと大本のなかでも反天皇色が強かった。立教したのは昭和五年なんです。その時分の谷口雅春は天皇問題を扱っていない。その後、天皇絶対になっているが、生長の家は最初は決して天皇絶対ではなかった。むしろ大本における世直しの幻想が破れて、小市民的な現世利益になり、かっての天理教、弾圧後の天理教、金光教、黒住教が進んだような道を雅春は進もうと思ったと思うのです。

ところがある程度信者が出てくると、もともとくさい人間だということで官憲からの目が光ると、今度は急転直下極端な天皇論にいく。「天皇のみが世界に実在する。天皇以外はすべて存在していない。戦争をやるときには、敵兵なんて本来存在していないのだから、本来存在しないものを無に帰するんだから、それは神の愛だ」（笑）というような調子で、皆殺し論理を出す。右翼のなかでも極端な天皇論ですが、そういうものを追求していく。これも一種の転向のなせるわざだと思うのです。せいぜいメシア教が手でなぜると病気が直るとかいうことで細々とやっている。大本系教派が主に展開するのは第二次大戦後だと思うのです。

そのなかでおもしろいのは、まず世界救世主教、別名メシア教です。この場合は大本に対してもうひとつの新しい位置づけをしようというわけです。大本は出雲の復権です。それに対してメシア教の岡田茂吉にいわせると、「出雲だって外来なんだ。支配者なんだ。出雲と高天原（彼は高天原とはいわないが、天孫族と称する）天孫族と出雲族がガタガタやっているけれども、われわれにとってはどっ

ちも支配者だ。それに対していまこそ大和民族が新しく皇道につく」といっている。それは岡田茂吉がつくということで、明らかに救世主教を擬しているわけです。

それにもかかわらず、世界救世主教の場合はもともと現世利益が中心であって、岡田茂吉は商売っ気が多いので、口先ではいってみたが、そんなことを本気になって考えるのではなく、普通の現世利益的な宗教論のなかにはいっていってしまった。岡田茂吉の天皇観は世界救世主教の信者の間でもはっきりしていない。もちろん教義的にははっきりしたものを残していますけれども、それで普通の現世利益になっちゃった。

もう一つは、あなない教ですね。あちこちに天文台を作って所有権をめぐってよく問題になりますが、このあなない教は、「天に一日、地に一陽」ということをいう。結局一陽は私だ、というのです。中野与之助という人ですが、なかなかよくしゃべる人で、僕なんかいろいろなことを考えるうえで信頼性に欠けるところがあっても、あなない教関係からでないとみれないものがある。よくしゃべってくれます。

そういった形において、自分が天皇になるという思想を抱いているのですけれども、これも、もともと天理教が持っていたような幻想にせよ、世直し的なパッションにせよ持っていないんですから単なるたわごとにしかすぎない。それに対して天行居なんかははっきりしている。天行居の影響を受けて、出てきたのが北村サヨの踊る宗教がある。「いまの天皇は蛆虫だ」と新しい紀元まで作っている。そういった意味では間接的には大本の落とし子です。

もう一つは、さっきいった生長の家です。生長の家の場合は僕もいたからわかるんですが、生長の家の教義は天皇絶対だが、天皇絶対という教義は生長の家が形成される前史の痕跡を残しているわけです。だから、教義を追求していった場合にどうなるのか、天皇万歳になれるかどうかといった矛盾を含んでいる。もちろん谷口さんは天皇反対だからそんなことはいわないし、教団自身は明らかに右翼路線を進んでいるわけです。だが、教義に内在的な、歴史的な痕跡はある。それがどういうところに出てくるかというと、一つは、やはり出雲観が出てきちゃう。スサノオノミコトが地球の主宰霊なんだから、それに対してクチナラヒメが日本の霊だ、というようなことをいい出す。生長の家は男が中心で女が従だ、ということで出雲が上になってしまう。

歌の中に、「いまの天皇は我の力を出して迷っている。

だから生長の家、結局、谷口が救ってやるんだ」というように解釈出来る歌が出てきたりする。また、いわゆる新興宗教ではどこでも本尊が大事だが、生長の家の場合はそれがはっきりしていない。スミヨシノオオカミがあるが、それが本尊になったり、天皇が三位一体で本尊になってみたり、どっちが本尊なのかフワフワしている。本を読むと、本ごとに違う。

もう一つは、大本にあるキリスト再臨の問題です。もともと谷口は皇位の上にキリストが再臨するといっている。それが谷口もいつの間にか、再臨キリストになってしまった。この変化があったので、戦後は生長の家内部から教義の矛盾の問題がでてきて、天皇中心じゃない新しい神秘主義団体に大量に移行する。それは、〃空飛ぶ円盤〃なんて変なものなんですが、「もともと出雲族は平和な民族だ。そして宇宙人とつながっているのだ。宇宙人の文化を継承している。そこへ天皇族がやってきて、天孫降臨などというフトいことをいっている」という。こういうことが生長の家の内部から出てくる。

このように、主観的にも客観的にも天皇信仰でしょうけれども、それにもかかわらず、そういった矛盾を持っている。

教義における歴史的な背景と同時に、もう一つは、信仰の権威というものの絶対性です。そうした場合に、あくまでも中心的な権威を持てば天皇がわき道へいく。天皇に信者がいってしまうと教祖の権威が宙ぶらりんになる。そのワク内における神道系の宗教形態の矛盾です。その二つの面があると思う。いままではどっちかというと内在的な矛盾の面は宗教学者によって追求されていたが、歴史的にそういう背景があるんだということ、それ自身が世直しの絶望以後のいろいろな変遷を経て今日に至っているというようなことは割り合いに無視されていたんではないか。

**丸山**　神道系の新興宗教のいろいろな類型があると思いますけれども、現実にある天皇に対する見方、要するに天皇論の典型的なものを二、三出して、お話し願いたいと思います。

**奥村**　典型といえば、神道系新興宗教でいちばん典型的な天皇論といえば生長の家だと思います。イデア論の立場をとります。あらゆる現象は存在しない。存在するものはイデアだけである。それはつまり唯一絶対の神である。アメノミナカヌシノミコト、アマテラスオオミカミと天皇というものは一体である。そういうふうな形をとります。だから現人の天皇とかけ離れた、理念としての天皇とは空中

分解する危険性を持っている。これがひとつの反天皇論、例えば大本みたいな意味での反天皇を出す場合にはイデアとしての天皇をだれが継承するか、というふうに変わる。そういう宙ぶらりん性を持っていると思います。その意味では、大本におけるかっての天皇論と、現在の生長の家の天皇論は立場こそ異なれ、同じようなものだと思います。類似したものです。大本の場合は実相と現象とが、ことばは違いますけれども……。

**丸山**　イデア論としての天皇論と、もう一つは即物的な天皇論ですか。

**奥村**　即物的な天皇論はともかく歴史的に説明していきます。民族の歴史のなかにおいて、ともかく民族の中心に天皇がいた。またこの天皇はかっての日本を作り上げた。信じているか信じていないかは別として、神々の正当なる子孫である。そっちのほうが一般化している。オーソドックスです。位置づけはいろいろあるけれども。

**丸山**　その天皇論と自己の教団の教祖なり、始祖なりとのかかわりは常に内在した問題としてあるわけですね。

**奥村**　いわゆる一般的な、歴史的な、国学的な天皇論を離れて神学体系を築き上げて、天皇論を打ち出した場合には、常に両面性を持っているわけです。実際に歴史的にみた場合にも一人の人間が天皇のイシアニストであり、反天皇のイシアニストである。そういうことが一人の人間のなかに、極端な場合には、自覚的矛盾にならずに同居している。その矛盾を持っているわけです。近代的な教学体系というか、文明宗教的な教学体系のなかで天皇論を位置づけるには、常にそういう矛盾するものがある。もともと天皇はアニミズムのなかから生まれてきたわけですから……。

**丸山**　このことは現在の右翼思想の問題との関連で、あとからまた触れていただくとして、神社の問題です。神社をめぐる教派神道とのかかわり、あるいはかかわらないという問題もあります。天皇の問題とは別な意味で複雑な問題があると思います。

**奥村**　古く歴史をさか上ればわかるように、もともと民衆の間に、原始的なアニミズム信仰があった。それが広い意味の神道です。それに対して政治的、人為的な操作によっていろいろな格づけをやった。律令時代からそうです。そういうことと必ずしも、民衆の間における神社を中心とした宗教生活というものはピッタリしないし、全くかけ離れてもいない。そういうなかで特に問題になるのは、権力者によって指示された神社崇拝のあり方なんです。明治以後になりますと、キリスト教の影響も受けて倫理神化して

しまう。その神道のあり方は奈良朝時代の律令体系のなかにもすでにあるわけです。そうなった場合でもなおかつアニミズム的な、もっと卑猥な手合もあるわけでして、もともと神道において生産というのはセックスと結びつくのです。神社の前で性行為を行なって、そのことによって生産を促すといった、呪術信仰があるのです。そういうものも含んでいる。

と同時に、かっての古い共同体的なつながりもある。ある意味では封鎖的な村だけの共同体制の中心でもあるわけです。そういった神社に対する宗教心と、上から出されてくる神社崇敬政策というものと矛盾します。幕末においても大名なんか、国学なり、儒学なり、尊皇論なり、水戸学なりの影響などをうけて神社崇敬をやり出すと、まず因子を整理しようということで逆に神社をつぶしていく。ほんとうの民衆が信じている安産の神とか、ある程度卑猥な習慣を含んでいるとみられるような神社をぶっつぶしていきます。セックスのシンボルを祀ってあるような神社はぶっつぶされて、ご神体を取り替えたりする。

もう一つは、各神社はそれぞれの由緒がある。その神はもともとその地方のかっての豪族であり、かってなんかの業績を残した人、あるいは山であり、谷であり、カッパであったり、いろいろなものであるわけです。ところがそういうものではおもしろくないということで、スサノオノミコトであるとか、なんとかのミコトという神を密輸入してくるわけです。そういったものを持ってきても民衆の間では、そんなことはお上のやることである、といって、同じ神社を拝むといっても、もっともらしいナントカ神社といわれるものに対しての崇敬の念とは別の宗教感情が民衆のなかにはあるわけです。その矛盾こそまさしく教派神道を生んでいくうえで大きな母体になっていると思います。

**丸山**　道祖神信仰というのがありますね。あれなんか典型的なセックス信仰ですか。

**奥村**　そうですね。いちばんセックス観が大きいんじゃないかと思います。天理教の中山みきさんにしても、女としての苦しみ、あるいは子供をなくす。それが彼女自身の宗教的な一つの原体験になります。そういう面において民衆のなかにおけるセックスは単純なセックスだけではなくして、生産とも結びつく呪術的な世界です。しかし、支配者集団はそれを無視していると思います。

**丸山**　そのへんが新しい教派神道を生み出していく大衆のエネルギーになっているのですね。

**奥村**　明治以後の国家神道は魂のない、宗教的な精神の

ない個々の右翼なんでしょう。そのなかには民衆が安心立命を求めることは出来ない。しかも仏教は江戸時代に徳川幕府と結びついて、腐敗惰落した。民衆の意識のなかの仏教と神道は対立するものではない。混沌しているわけです。もし明治時代に仏教にすぐれた指導者がいて、一向一揆や法華一揆なんかの伝統を受け継いでおれば、民衆は仏教団体のなかに参加したかもしれないけれども、それがなかった。国学、あるいは儒教系の神道論にしても、一面において進歩的な側面もあったと思う。そういうものといろいろな形で結びつく。その結びつき方が悪いと、今度は逆に形骸化して、立派な教義体系が出来て民衆の信仰が圧迫されるという面もある。けれども、ともかくそういう形において結びついて教派神道は民衆の間に大きなエネルギーを持ち得たと思う。

**丸山**　僕は「中央公論」に、そういう土着的民間信仰を媒介にした政治的情念の爆発、という書き方をしたけれども、この場合の「おかげまいり」とか「ええじゃないか」の運動は教派神道とは直接かかわらずにあったんですか。

**奥村**　というよりも、教派神道がそれにかなり影響された。それと同時に単に教派神道だけではなくて、その「ええじゃないか」の伊勢参りの動きは、もともと富士講なんかにもありますが、世直し的なものは明治の自由民権運動のなかにも継承されている。それ以前の農民一揆や、あるいは大塩平八郎の乱にしても、自由民権運動のなかにおいても世直し、ということばが出てくる。

これは先日なくなられた田村栄太郎さんがよく研究されていると思います。

明治以後になりますけれども、例えば島崎藤村が「夜明け前」を書いています。ああいった国学の悲劇というものを受けて、信州における農民運動が国学の残党のなかから出てくる。だから、伝統的に信州というのは革新的な運動が強い。その一つの歴史的な背景が信州国学にあるわけです。ということは、考えてみればわかるように、明治の自由民権運動を支えた基盤は豪農・商ですね。それは国学を支えた基盤でもあるわけです。

**丸山**　「ええじゃないか」の世直しの思想が自由民権にもっとまともに受け止められていけばよかった。

**奥村**　そうです。そこのところにおいて自由民権運動が西洋的なものを直輸入して、土着的なもののなかにある内在的な批判の芽を伸ばし切れず、むしろそれと対立するような形をとった。それでは、そういった人たちが近代的な主体性を持っていたかというと、そうではない。非常に前

近代的な、伝統的な神道を持つ。また、持つ故に逆に観念的な形において、実生活のなかでは完全に融合出来ないような西洋思想を受け入れる。ということは、逆にいえば土着的なもののなかにある進歩的な要因も、対象化してとらえることは出来なかった。そういうことがいえると思います。

**丸山**　そういう自由民権運動の挫折していく重要な問題と、一方にはそのエネルギーを天皇制に組み替えていった権力の側の非常に巧妙な宗教政策があった。それともう一つは、右翼思想としては明確な形成をみていないけれども明治末ごろからやや現在につながってくる右翼の問題がある。

**奥村**　右翼思想も、いわゆる自由民権運動を離れては成立しなかった。

**丸山**　挫折から？

**奥村**　そうじゃないんです。民権運動のとらえ方で若干疑問を持つのはこんなことですが、民権運動における民権と国権をストレートに対立させてとらえる見方があると思うのです。しかし、明治期における民主革命というのは一面においては国民革命であり、要するに民族国家の樹立です。そういう歴史的な課題もある。当然資本主義国家を前提とするわけで、あの状態における資本主義的民族国家の樹立ということは、民権と国権は必ずしも矛盾しないと思うのです。ただ、どういう形によって形成されていくか、小国主義か、大国主義かなどという自由民権運動のなかの意見の対立がありましたけれども…。そういった問題だと思います。

**丸山**　図式化していえば、民権運動もまた新しい国家の権力に対するアプローチでしょう。それが、ただ、権力の側に組み入れられている部分と、参加を願望している部分と、力量を持ちながらも疎外されていく部分もある。あるいは政策上の対立も当然あります。そこらへんから日本右翼は生まれるわけでしょう。

**奥村**　もっと古いです。民権運動のまさしく発生期において出ています。つまり、玄洋社は明治十年前に出来ています。まさしく初期民権運動のなかから出ている。そのなかにおける士族的な要素と豪農商的な要素は若干ニュアンスが違うとするならば、まさしく薩長土肥、特に薩長以外の士族のなかにおける国政参加要求です。

**丸山**　例えば会津あたりのね。完全に疎外されます。

**奥村**　会津の場合は同じ士族から出発しながらも、性格は豪農商にポイントをおくように変質しています。あるい

は越前藩の場合など。それに対して士族的な立場に立つのは熊本なんかにもいますし、肥前なんかそうです。

**丸山**　思想的にはどうなんですか。ことに西郷隆盛の征韓論とか…。右翼というものを西郷隆盛までさか上らせることが出来るでしょう。出来るわけだけれども、実際に初期右翼として成立するのは？

**奥村**　初期右翼が成立するのはもっとさか上らないと歴史的に出てこない。明治維新というものにいろいろな勢力がかけるわけです。一つは、豪農商的なもの、もう一つは天皇制国家の官僚になっていくある意味では開明的な専制者たちです。それに対してむしろ僕は明治維新を絶対主義というふうにはとらえない。ボナパルチスム権力だと思うのですけれども、ボナパルチスムではなくて、あくまで絶対主義としてとらえるのが西郷一派だと思います。そういった意味で逆転していると思う。右翼の西郷隆盛は確かに優秀な人間であったし、明治維新の原動力であったけれども、彼自身はあくまでも士族中心の絶対主義国家というものにポイントをおいていた。

それに対して、絶対主義を超えてボナパルチスム権力を樹立しようとする天皇制国家官僚の間には当然対立があって、西郷隆盛一派がやられる。そのやられ方は尋常なやられ方ではない。西郷隆盛の軍勢のなかにはいろいろな勢力がはせ参じるが、そのなかにはむしろニュアンス、考え方を異にする自由民権派が参加するわけです。それぞれの自由民権派は板垣をみてもわかるように、士族的であってまだ豪農商の間に自由民権運動の主導権は握られていない。

一方においては、福沢諭吉が西郷隆盛を高く評価している。いわゆる開明派からみても政府権力に対する叛逆の中心である西郷に対して思想的立場がかなり違っているにもかかわらず、それでもなおかつ自己の思想を西郷に投影する。その当時における右から左までの部分が西郷隆盛に自己の明治政府に対する反対感情を投影する。それが西郷神話のひとつの大きなモチーフになると思います。

その西郷に、民権運動のなかの特に国権的・貴族的側面が強い玄洋社なんかが結びついていく。あの当時の明治政府は、基本的には侵略的な野望は持っていたけれども、いきなり事を構えるにはあまりにも国力が弱いことがわかっているから、まず英国と結びつく。従属的に結びつくような形をとりながらも、富国強兵に進んでいく。そういうことがまどろこしくて仕方がないという面が右翼にはあると思う。その右翼運動と国家権力の主流とはお互いに対立しながらも、あいもたれつつ存在している。急進的ファシズ

ムが出てくるまではそうだと思います。

**丸山**　急進的ファシズムが出てくるまでの前段階、自由民権までを初期右翼とみていいわけですね。

**奥村**　そうです。

**丸山**　どうですか。ぼつぼつ急進右翼の問題に…。

**奥村**　北一輝からでしょう。北一輝の場合はおもしろいのは、非常に土着的なものに対して鋭い目を持っていたと思います。そういった土着的な感情、土着的な世界を最大限に彼は利用しようとしていたと思います。

**丸山**　急進右翼にはいってくると日蓮系の右翼が出てくる。だが、井上日召にせよ、北一輝にせよ、アニミズム的な信仰の形といいますか、情念、そういうものの系譜、法華経信仰とはいうものの、そこに神道的な信仰との内的な統一性があったと思うのです。

**奥村**　日蓮宗の場合、非常に呪術的な性格というのは強いわけです。しかも、日蓮自身の国家観というものは、あくまでも国家は利用する手段にしかすぎない。だが、それをどう読み違えたのか、立正安国論以下を逆に読んでしまうわけです。国柱会以後の歴史は。もちろんそれ以前にもありますが、それは権力と野合するなかで日蓮の教義とはずれていったんだと思います。現在ある国家権力に結びつく形というのは、現在ある国家権力を打倒すること、法華経信仰によって変質せしめたときに初めて聖なる国家になるのではないですか。ところが日蓮系の場合はそうならない。現在ある国家を聖なるものにしてしまって、呪術的な力を持つ。呪術を持つということで、北一輝の場合においても理論体系は博学ですが、内在的な矛盾があるわけです。その内在的な矛盾は天皇制と結びつくと思うのです。

というのは、彼自身は現在の国家権力を打倒しなければならない、にもかかわらず、結局、国家権力の中心は天皇にあるし、現実には天皇がある意味では倒すべき体制の中心でありながら、それを急進ファッシズム運動ですから、逆に天皇の名によってやろうとする。そういう矛盾というものが北一輝の思想のなかにある。それがさらには、二・二六の青年将校の場合になると、天皇に対する幻想がもっと強いのです。天皇はほんとうにいうことを聞いてくれるだろう、と思っているが、北一輝の場合にはそんな単純な幻想は持っていない。その矛盾を理論的に解決出来ないで結局その救いを呪術的な信仰、しかも読み替えをした立正安国論以後の日蓮の国家思想による聖なる国家の実現を期待し、理論的には正当化出来ないものを追求していく。自分自身の内面的な支えにもなっていく。そういう側面は強

いと思います。井上日召にしても形は違うでしょうけれども…。

ヒットラーの場合は急進ファシズムとしての性格がはっきりしていると思います。王朝というものを古いものとして退けていくことができて、ネーションを立て、ネーションの中心者としてナチの総統ヒットラーを立てることができる。日本においては、天皇制があるばかりに立てられない。そこがジレンマです。

**丸山**　泣きどころですね。

**奥村**　だから、決してナチズム的にはなれない。理論的にもなれない。ある意味ではムッソリーニと似ている面もありますが、もっと矛盾は大きいと思います。

**丸山**　現在の生長の家そのほかにもありますけれども、いわば右翼運動と新宗教の現状を少し話していただけませんか。

**奥村**　ともかく第二次世界大戦における敗北は、右翼にとっての決定的な敗北だったと思うのです。そのなかでも誠実な右翼というのは変ですけれども、右翼思想に対して誠実なものは自決の道を選んだ。その人たちは思想は別として、自分の思想に忠実だったと思いますけれども、それに対して戦後の右翼は理論的な破産があって、その後の逆コースといわれる時代がくるまで支離滅裂だと思います。一生懸命、「民主主義万歳」といったり「自由主義万歳」といって支離滅裂だった。「一億総ざんげ」なんてことばは右翼がいい出したことばですが、そういう形で出てきた。結局、いろいろな形で戦前からの人脈があって、それぞれの若干の政治的バックもあって、右翼運動は戦後ずっとつづいていたわけですが、ほんとうの意味での大衆的な右翼運動というものはなかったと思います。それで、一応ある程度、現世利益の信仰と国家主義的な面と両方抱えこみながらやってきたのが生長の家だと思うのです。

十万を越えるような人間を一つの運動のなかに網羅してきた。けれども、その場合も現世利益の面と国家主義的な面とは内面において矛盾する。あるいは教義の面において矛盾があり、そのほかにも極端すぎる面がある。極端すぎるというのは、明治帝国憲法の復現がスローガンにはいってしまうというようなことです。ゆきすぎてしまう面があって、大衆化出来なかった。

それに対して、戦後におけるほんとうの意味での大衆運動の形を現在展開しようとしているのは日学同の人たちだと思います。日学同の人たちはこれにも泣きどころがあるけれども、ともかく普通の右翼がかなり現体制にべったり

な面が強いのに対して、安保に対して批判的な側面を出している。将来は核武装も含む国力の充実を待って、安保がなくてもやっていける、日本がひとり立ちでやっていけるという方向を目ざしている。財界の自立防衛論とも相通ずるわけです。弱い面は、日本はアメリカに従属しているというようなことはないけれども、日本が今後アジアに対して帝国主義的な政策を進めていくうえで、アメリカとの同盟関係は今後も続いていくだろうという立論です。

しかしこのような主張もただ日本自体の防衛力普及とか精神的なナショナリズム鼓吹の面においての補完的作用以上のものは果たさないだろう、とみることができるでしょう。もう一つの問題は右翼ファシズム運動というものは最終局面においては、急進派といわれているものは切られると思います。戦前において二・二六の北一輝がやられるように、ドイツにおいてもヒットラーがやられるように。私は、大衆のなかにおける特に没落していく農民とか都市の旧中産階級の持つ、ある種のさか立ちした権力への憎悪感対抗意識というものを抜きにして大衆的な、下からのファシズム運動というものは成立し得ないと思います。そういう要素は最初から今の日学同にない。その面において最初から急進ファシズム的な要素は内包していない。現在の日学同が大きく伸びていけるかどうかは非常に問題があるのじゃないかと思います。

**丸山**　右翼から見た創価学会は、どういうふうに評価するわけですか。

**奥村**　右翼から見たといっても、やはり神道系の人たちは明らかに創価学会に対して非常な対抗意識を持っていると思います。一般的に右翼の間では創価学会に対して、憎悪心とか、軽蔑というものがあると思いますけれども、これは自分でいっているほどそんなに強いものではないと思います。なんとか利用出来るのじゃないか、というような点もあると思います。

同時に、創価学会自体は、戦後日本における右翼的なものが大衆的に成立する基盤を先取りしていると思います。だから、いまさらゴタクをならべてもちょっと無理なくらい右翼の基盤は創価学会に持っていかれた。問題は逆に創価学会が右翼化するかどうかしかないんじゃないか。その点、創価学会はハト派まではいくけれども、公然とファシズムまではいけないんじゃないですか。かなりあいまいな点があるにしても、やはり、いろいろな宗教のなかにでは筋の通っているほうじゃないかと思います。

**丸山**　いまの創価学会の問題とかかわりが出てくるので

すが、日本の右翼は伝統的に天皇の問題をかかえている。それは同時に、神道系の新興宗教ともかかわりが内在的にあるわけですね。

**奥村**　直接ない人もいっぱいいますけれども、内在的にはあるわけです。全然無視しては成り立たないでしょう。

**丸山**　そうすると、いまの創価学会がこれだけの人をとらえてきた、しかも、大衆的基盤を持っているということは、日本の土着的な民間信仰といいますか、そういうものを基盤とした旧右翼が伸びていく余地は少なくなったとみていいですか。

**奥村**　旧右翼という形においてはあり得ないのじゃないかと思います。その一つの試みが原理研なんかじゃないですか。新しい右翼の開拓ですね。キリスト教をとり入れてやっております。

**丸山**　そうすると、日学同の場合は系譜的な人脈かもしれませんが、どういう右翼としてみられるのですか。混然としていますか。

**奥村**　一応、伝統的には右翼の正系です。それに通ずるような形を形式的にはとっているけれども、内容的にはかなり独自のものを内部的に再生産しているのじゃないですか。

**丸山**　それはいまいった土着の問題というものとどうかかわるんですか。

**奥村**　そういう面では、ジャーナリズムに乗るような民族史観、民族文化史観というものと大体同一じゃないですか。そう現在はいわれています。日本文化論精神史、歴史学など、いろいろな本が出ておりますけれども、ああいう人たちの日本民族のとらえ方、文化のとらえ方というのは右翼の行動のパッションにどれだけなれるか。まして民衆のなかにまだ都市化時代とはいえ、潜在的な意味での土着性要因は強いと思います。それを引き出す。それにはきれいごとの民族文化のとらえ方をやっていたんではでき得ないのではないか。

**丸山**　奥村さんのほうで用意された問題で、落ちている部分はありませんか。

**奥村**　別にありませんが、全然主題にはかかわりがないと思いますけれども、エピソード的なものとしては、さっき大本系の教団についていろいろいいましたけれども、ちょっと触れてみたいのです。

熊沢天皇なんかが戦後出てきましたけれども、人脈的なつながりはあるわけです。南朝正統がだれだというようなことがある。それから、日本には「日本・ユダヤ同祖説」

がある。もちろん明治以後でてくるのですが、日本人はユダヤから別れた、とか、キリストは日本の皇族の末裔とかそういう考え方が大本系にはダブッてあるんです。それと南朝再興運動から神代文学をかつぎ上げたり、ダブるわけです。

そのなかでおもしろいのは、キリスト教の一派にギリシャ正教の、ハリストス正教会があります。ニコライ堂ですね。あのニコライという人は幕末に日本にきたわけですがロシアのスラブ神秘主義の一派です。日本にきて平田系の国学の本を読んで、平田が国学のなかに密輸入したキリスト教に感激して、「まさしく日本のなかにはキリスト教と同じ精神がある。キリストは、日本に再臨するのではないか。神道プラス・キリスト教で日本は活躍するのだ」というような考え方を持っていたといわれます。ニコライ堂のなかにそういう考え方を抱いている人たちは現在でも相当います。

その流れのなかで、キリスト教の土着化を進めた人に中田重治がいる。広い意味の大本的な流れとかかわりあいを持って、キリスト教の教会のなかで聖書を説くと同時に、古事記もやる。そういうようなことをやった一派は戦時中には弾圧を受けました。ヘンなキリスト教というというわけですが、キリスト教からいえばかなりおかしくなっちゃったと思われるような面が弾圧を受けて、まともなほうは――一部の良心的な人たちは弾圧を受けているが――、割りあいにスムーズに異なる神を拝んでいたわけです。こんなこともおもしろいのじゃないかと思います。ハリストス正教会は神社を拝むわけですが、それは教義的に、必然的にそうなるが、キリスト教の神を拝むと同時に、神社も拝むという形をとっているらしいです。全部が全部そうかどうかしりませんが…。

**丸山**　現在の時点に立って天皇制の問題はどういうふうに考えておられますか。三島由紀夫あたりが扱っているような問題もありますが…。

**奥村**　三島さんの場合は、右翼的な意味での流れからいってもちょっと異質だと思います。というのは、三島さん自身はほんとうの意味で別に右翼的なテーゼを確信を持って信じているのではないと思います。あの人自身は若いころ日本浪慢派の影響を受けて、敗戦によって日本浪慢派がみじめな形で崩壊していく。そういったなかで、ある意味では、さめた精神を持っていた。それが戦後の反動期のなかで貴族主義的な精神が一種のフォルム信仰みたいなものと結びついて、能なんかを日本文化の中心に持っていくとい

うようなことをやった。そのなかでひとつの観念的な遊戯ですか、それを自己の文学生産の場に利用している。彼自身はそのためにのみ現在の天皇制がなければならないし、その意味では彼にとっては天皇制は大事です。しかし、本気になって彼が信じていることとは違う。文体からみてもわかるように、浪慢派の文体をさか立ちすると彼の文体になる。感情が過剰みたいな形で、何をいっているんだかわからない、浪慢派の文章はほんとうに情感の不安というか動揺といったものを露出していると思います。ところが三島はピチッと外面を完全に壁で閉ざしている。三島を浪慢派と位置づける人がいるが、浪慢派はそういう意味では最後にどうしてものたれ死にしなければいけないような要素を文体のうえからも持っているわけです。ところが、彼の場合には一回そういうものにあこがれて、パーになって逆にそういうものに対して目ざめた精神を持った。それをメカニカルに構成していく。観念的な遊戯です。あれを浪慢派というのはおかしいと思う。落し子ではあるけれども。

**丸山**　いろいろお話をうかがっていると、いわゆる日本的というか、土着的なものが天皇制に象徴されるような日本思想に結晶すること、いうなれば日本ナショナリズムの可能性はなくなってきているという感じがしますが。

**奥村**　ないでしょうね。今後は、右翼は主流にはならない。しかし、日本には習合思想というような、お互いに補っていくという性格がある。民社党なんかにも近代化史観がある。ああいった見方、産業社会論的な見方、それから勇ましい古典右翼的な見方、天皇よりも現実の政策なんかを中心にした非民族主義的なやり方、そういうものがお互いに別々に出ながら、お互いに論理的には矛盾しながらも補完的な役割りを果たしていく。それぞれ心情的にトータルに、ナチズムが民衆をつかまえたようにつかまえられないから、それぞれの部分に応じて民衆をイデオロギー的に食いあさっていく。その面における成功性は十分にあると思います。

**丸山**　いま権力の側からは靖国神社の国営化法案のようなものを出して、神道の国教化みたいなことをやろうとしていますが、右翼運動のほうからみてこれは不毛な作業でしょうか。

**奥村**　不毛ではないと思います。有効性があると思います。

**丸山**　どういう形で有効性を持ちましょうか。

**奥村**　いわゆる遺族会なんかが中心になっていますが、つまり、個人の生と死というものが国家によって無理やり

に死を強制されていく形にはいっていく。それが過去のことになると、強制的な死であっても大衆にとって自己の内面問題としてはっきりと自覚的に分析出来ない。しかも、ある過去において恨みをいだいたとしても、それを忘却してしまい、むしろその死を聖化したいという気持ちが、大衆の意識の底にはあると思います。靖国神社が国家で護持されることになった場合、それを通して逆に国家によって自己の夫が、父が奪われたことに対する恨みではなくて、反対の方向へ転化していくでしょう。そういう心理的な回路というものは、かなりまだ大衆のなかには強いと思います。そのことはたんに遺族だけではなしに、その周辺の人たちにも影響を与えていく。次の帝国主義戦争へとつながっていく死の強制という国家暴力の聖化作業でしょうね。

**丸山**　今夜はいろいろとうかがいまして、ありがとうございました。